

SP レコードのスリーブに関する一考察 : 田村悟史 コレクションを事例とした整理と研究

大久保, 真利子
九州大学総合研究博物館 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/7171722>

出版情報 : 九州大学総合研究博物館研究報告. 21, pp.85-112, 2024-03-31. The Kyushu University Museum

バージョン :

権利関係 :



SP レコードのスリーブに関する一考察 —— 田村悟史コレクションを事例とした整理と研究 ——

大久保 真利子

九州大学総合研究博物館専門研究員：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
okubo.mariko.946@m.kyushu-u.ac.jp

要旨：九州大学総合研究博物館は、約4万枚のSPレコードのほかにその関連資料も所蔵している。本稿はレコードを入れる袋（スリーブ）に着目し、所蔵内容や分類について紹介するとともに、研究に用いる際の課題について考察を加えるものである。

キーワード：スリーブ、SPレコード、レコード会社史、田村悟史

はじめに

九州大学総合研究博物館は2014年に故田村悟史氏（1940-2009）が主催していた「手仕事舎」旧蔵資料の寄贈を受けた〔三島 2018〕。そのなかにはSPレコード約4万枚のほか、その関連資料も含まれている。筆者はこれまで田村悟史氏旧蔵のSPレコード（以下、田村コレクション）の分類について紹介したほか〔大久保 2018〕、SPレコードコンサートなどを通じて所蔵資料を用いた活動などをおこなってきた¹。そのほか全国のSPレコード所蔵機関について所蔵状況や整理の現状などについて調査し、九大博物館の所蔵資料の特徴を明らかにしてきた〔大久保 2022〕。本稿はSPレコード関連資料のうちレコード袋（以下、スリーブ）について紹介するとともに、スリーブを用いた研究可能性について述べるものである。

1 スリーブの概要と旧蔵者田村悟史の視点

現在SPレコードを対象とした研究には、録音された音や音楽を用いたものや、録音内容の目録化や文化的背景を論じた研究などが多く見受けられ、レコード盤そのものへのアプローチが大半を占めている。ただSPレコードが流通した時代には、レコードは盤面むき出しの状態

で売買されていたわけではなく、1枚のみの単体であれば場合によっては歌詞カードとともにスリーブに入れられ、複数枚の組み物であればアルバムに入れられ流通していたようだ。つまりスリーブやアルバムは、会社やレーベル（レコード会社がもうけた商標）の顔であり、広告的な役割も果たす場合があるなど、作成した側のメッセージを読み取ることができる貴重な資料と言える。

これまでスリーブを扱った先行研究が数例確認できる。たとえば大西は日蓄および日本コロムビアを対象にして盤面中央部の紙貼りの部分²を中心にスリーブについても体系的に調査し紹介している〔大西 2011〕。また京谷は田村コレクション内のスリーブを用いて、デザイン学的視点から考察を加えている〔京谷 2018〕。そのほか毛利は、国産のレコード会社のうちデザイン的にユニークと考えるスリーブをピックアップし、レコード会社やスリーブデザインの背景など解説を含めながら紹介している〔毛利 2021〕。このように研究が限られている背景としては、毛利が指摘しているように、スリーブそのものが紙製で脆く、状態良く残っていることが少ないことが挙げられる〔毛利 2021：6〕。

以前拙稿でも紹介したように、旧蔵者の田村はSPレコード本体を販売当時のスリーブから出して、現代になって作成された何も書かれていないスリーブに入れ替えて管理していた〔大久保 2022：6〕。そして販売当時のス

スリーブや歌詞カードは廃棄することなく、別箱にまとめて保管していた。田村による整理・保管についての詳細は後述するが、ここでは田村によるスリーブの利活用事例を紹介する。

まず田村が活動の拠点とした「宝珠山劇場」の壁の一部には、スリーブを貼って装飾した写真が残っている（図1）。そのほか、所蔵品を収納する段ボール箱のデコレーションとしても用いていたようで、図2のような箱が残っているほか、「段ボールはりつけ用／カット済／ジャケット」と書かれたビニール袋があり、その中には袋状になったスリーブを分解（カット）し紙状にしたものが入れている。また生前の田村と親交があった京谷啓徳氏によると田村は古物市などにSPレコードなどを出品しており、その際スリーブも販売していたようだ。値札を付けたスリーブも何点か確認できた。

このように田村は、とりわけスリーブのビジュアル的な要素に注目し独自の方法で再利用していたことが確認できるが、これらは重複して所蔵しているスリーブのみを対象として行われていたことに注目したい。つまり次



図1 「宝珠山劇場」の壁面



図2 スリーブを貼り付けた段ボール

節にて述べるように、田村は自らが所蔵している大量のスリーブについて整理し、その内容を大体把握していたことが明らかとなった。

2 資料紹介

2-1 分類の概要

田村コレクションのSPレコードおよび関連資料は、基本的に旧蔵者田村による整理分類のまま保管している。今後は分類方法について見直す可能性もあるが、本節ではスリーブに関して田村の分類や整理の方法を紹介するとともに、課題を明らかにする。

田村コレクションにはスリーブが入った箱が62箱ある。その内訳が表1である。このうち「未使用スリーブ」9箱は、現代になって作られた何も印刷や書き込みがないスリーブである。つまりSPレコードが販売されていた当時のスリーブは53箱である。これら53箱について段ボール箱への書き込みや中身などの確認から筆者なりに整理したものが図3である。大別すると「a 箱分け」されたものと、「b 五十音順」に並べられたものとなる。

2-2 箱分けされたスリーブ

ここでは、「a 箱分け」のスリーブについてあつかう。

aのスリーブは、発売タイトル数が多いレーベルが対象となっており、その分デザインについても大変多くのバリエーションを確認できる。たとえば我が国でもっとも歴史あるレコード会社である「コロムビア（ママ）」（現日本コロムビア株式会社）については、デザインや紙質の違いによって129種に分け、番号を付けた札をはさんで整理している（表1、札の欄参照）（a-1）。またその重複分については、番号や札を用いることなく別箱に入れて保管されている（a-2）³。a-1に付けられた番号は通時性を意識したものではなく、デザインなどが異なるものについてランダムに番号を付けた印象である。

また田村による番号付けの基準についてだが、デザインが同じでも刷り色が異なる場合には別の番号を付ける傾向があるようだ。ただ経年劣化による色落ちについても別番号となっている場合があり、今後整理を進める場合には注意が必要である。

その一方で、どちらか片面のデザインが同じであれば

表1 九大スリーブの所蔵内訳

分類	箱のラベル名	箱数	札
a	ニッポノホン	2	-
	ポリドール	2	26
	タイヘイ	2	29
	コロンビア (ママ)	11	129
	キング	2	90
	ニットウ (ママ)	4	28
	テイチク	4	63
	ビクター	11	122
	オリエント	1	12
	リーガル	1	5
	ニッチク/デッカ/ HMV/テレフンケン	1	-
b	50 音順	12	-
	未使用スリーブ	9	-

計 62

- a 箱分け
 ↳ a-1 番号付き
 ↳ a-2 その他
 b 五十音順
 ↳ b-2 分類表あり
 ↳ b-2 その他

図3 スリーブの分類

同一番号となっている場合が多い。具体的には図4について田村はすべて同じ番号を付けているが、注意深く見ると異なるアーティストの写真が用いられている。そのほかスリーブの片面は同じデザインであっても、もう片面に演奏者名や曲名など当時入れられていた盤の情報が印刷されている場合があるのだが、これについても田村はすべて同じ番号としている。ただこのような書き込みはスリーブとSP盤との一致を知る重要な情報である。そこで田村の分類をある程度踏襲しながら、枝番を付けるなど再整理を進めている。

2-3 五十音順に分けられたスリーブ

ここからは「b 五十音順」の箱について紹介する。

前述のように「a 箱分け」のスリーブは大手レーベルが対象だったのに対し、bのスリーブはマイナーレーベルを対象として、五十音順に整理されたものである。つまりaと比較すると大変多くのレーベルが確認できるが、同一デザインの重複はaよりも少ない。



図4 バリエーションの一例

「b 五十音順」の箱は、レーベル名の札を挟みながらア行から順に並べた箱 (b-1, 4箱) と、その他 (b-2, 8箱) とに分れる。まずb-1の箱に関してだが、箱の中身をリスト化したと思われる「レコードジャケット分類表」(以下、分類表)が残っている⁴(図5)。先頭の数字が多少欠けているものの左上の書き込みから、1993年3月8日に作成したものと考えられる。田村が活動拠点を東京から福岡県朝倉郡東峰村宝珠山に移したのが1990年であることから[三島 2018: 31]、その頃には既に多くのSPレコードおよびスリーブをはじめとした関連資料を所有し、整理を進めていたことがわかる。また同じ行の右にある「その他内容」とは、「a 箱分け」以外という意味だと考えられる。そしてこの分類表は、ア行からはじまり、ハ行までで終わっている。b-1の箱にはマ行以降のスリーブも入っており、レーベル名を書いた札も付けて整理が行われているため、分類表は作成途中だったと考えられる。ただこの分類表によって所蔵するスリーブの全体像が掴めるだけでなく、レーベル一覧としての役割も果たすことから、スリーブを用いた研究においては欠かせない資料だといえる。

またb-2に関してだが、箱に「未整理」や「未分類」と書かれているものがある。中身を確認したところ実にさまざまなスリーブが雑然と入れられている印象だ⁵。田村コレクションのスリーブのほとんどが10インチ盤用なのだが、b-2の箱には、数は少ないものの一部12インチのものや10インチよりも小さい盤のスリーブのほか、LPレコードのジャケットやアルバムケースなども入っていた。

このように「b 五十音順」のスリーブは、「a 箱分け」よりも、田村による分類の検証と再整理が必要だと考えられた。またマ行以降の分類表も完成させる必要がある。そこでb-1、b-2の別なく、レーベルを軸とした再整理を実施した(図6)。そうしたところ、分類表に漏れているレーベルが相当数見つかっただけでなく、田村による整理について、いくつかの問題点が明らかになった。

問題点の1つ目は、製作会社が異なる同一レーベルについて区別されていないという点である。たとえばマーキュリーというレーベルについては、製作会社がタイヘイ、キング、そしてアメリカの会社という3種が確認できたが、田村はこれらを区別しておらず、すべて同じ札を付けて整理していた。マーキュリーの場合は3つの製作会社が関わりをもっているが、レーベル名が同じであっ

ても製作会社が全く異なる場合もある。分類表に製作会社名を追記することも検討する予定である。

また、スリーブの大半はレコード会社が作成したものであるが、一部にレコード販売店が製作したスリーブや録音スタジオで収録した私家盤を入れるためのスリーブ、委託録音盤を製作していた会社のスリーブなどが確認でき、それらを区別することなく五十音順に整理されていた。田村はこれらについて判別がつかなかったのか、理解したうえで意図的に五十音順に並べたかは不明である。

そのほかレコード会社が使用するマークとレーベル名が混在しているケースも見受けられた。たとえば分類表には「シェル(貝印)」のほかに「内外」が記されているが、合資会社内外蓄音器商会在ナイガイという名称のレーベルでレコードを発売し、その際使用したマークがシェル(貝印)である。レーベル名をナイガイとした上で両者は統合すべきだろう。

3 再整理とスリーブ研究の実践にむけて

これまで述べてきたように、九大博物館は大変多くの

12.3.8 レコードジャケット分類表 その他内容	
1. アサヒ (ASAHI)	
2. アーティフォン (ARTIPHON)	
3. イーグル	
4. ウォールド (WORLD)	
5. エバサ・トニー (株)エバサ・トニー社	
6. エトワール	
7. エム・ビー・エム (M.B.M.)	
8. イイト (EIGHT)	
9. エンジェル (ANGEL)	9-1 エヌ・ケー・ケー (N.K.K.)
10. おどり	9-2 エヌ・アー・アル (N.A.R.)
11. OKEH (オーケー)	9-3 エヌ・アール・アル (N.H.R.)
12. 音研音盤	
13. オーゴン	
14. 小野ヒロ	
15. オデオン	
16. カナリヤ	
17. 金城	
18. キャピトル	
19. キリン	

図5 「レコードジャケット分類表」の一部



図6 bのスリーブ整理作業

スリーブを所蔵している。総数については現在調査中だが、SP レコードについては約 4 万枚を所蔵しているため、それと同数程度のスリーブが確認できるだろうと考えている。ただ経年劣化で痛みが激しいものや、折れやヨレ、破損なども目立つ。しかし筆者が把握する限りでは田村コレクションのスリーブは日本屈指の所蔵数を誇っており、資料として活用できる状態のものを選別し体系的にまとめることができれば、研究資料として十分に活用可能だと考える。そこで本節ではスリーブ研究の課題と可能性について考えてみる。

まず前提としてスリーブは、田村コレクションのように SP レコード本体とは別に保管されている場合が多い。また SP レコードがスリーブに入れられていたとしても、これまでさまざまな所有者を経て現在に至っていることを考えると、販売当時のスリーブと盤の組み合わせを追求するのは極めて困難である。ただ 2-2 で述べたように、ごく限られた事例かもしれないが、演奏者名や曲名が記載されたスリーブは当時の組み合わせを知る貴重な情報であるため、注意深く整理し、大いに研究に活かすことができるだろう。また年代ごとのスリーブの特徴をある程度把握している専門家の助言を受けることも重要である。

また 2-3 で指摘したように、田村コレクションにおいて SP レコードのスリーブを研究対象とする場合、スリーブの種類別に整理することも必要だと思われる。たとえば SP レコードよりも後年に発売された LP や EP レコードのジャケットは除外すべきであろうし、レコード会社、レコード販売店、私家盤録音業者、委託録音業者という製作会社の特徴別に分類をおこなったうえでリストを作成することが望ましい。

またスリーブの魅力として、ビジュアル的な要素を忘れてはならない。そこでスキヤニングによりデジタルデータ化し、体系的に整理・研究することを試みている。スキヤンするにあたっては、スリーブのヨレや折れなどができるだけ直すために、あらかじめアイロンをかけるとともに、フラットベッドスキャナを用いて TIF 形式 600dpi で、カラーセパレーションガイドとグレースケールを入れて、両面ともにスキヤンする方針でデータ化を進めている(図 7)。この際に問題となったのは、どちらが A 面/B 面かといったサイドに関する規定である。管見のかぎりスリーブのサイドの見分け方について明確に記さ



図 7 スキャンしたスリーブ

れた資料がない。そこで便宜上、スリーブ上部の指入れのためのスリットがある方を A 面、両端の貼り面部分の折り返しがある方を B 面など、サイドに関する内部マニュアルを作成し、作業を進めている。

さて以上のような方針で再整理やデータ化を進め、あらゆる意匠のスリーブを広く公開できたとしても、体系的に提示できなければスリーブの魅力も資料としての価値も正しく発信することはできない。そこでレコード会社史の作成も同時に進めている。作成しているレコード会社史は、あらゆる製作会社の名称や沿革だけでなく、各社がどのような資本関係を持ち統廃合したのか、そしてどのようなレーベル名でレコードを発売していたのかといった情報を網羅的に提示するもので、レコード研究において大変重要な資料となると考えている。しかしこれまで我が国においては断片的なものしか確認できず、日本におけるレコード史研究の遅れの原因ともなっている⁶。もし田村自身がスリーブの整理を行っている時に網羅的なレコード会社史があったならば、さらに踏み込んだ形で整理を行えたはずである。今後レコード会社史の作成を通してレコード研究の基礎形成に資するとともに、例えばビジュアル的な魅力を発信する資料としてスリーブを位置づけることで、あらたなレコード研究の一例を示したい。

おわりに

本稿執筆にあたり田村コレクションのスリーブについてあらためて所蔵内容を詳細に確認することにより、これまであまり注目されることのないスリーブについても

田村はレコード盤同様に価値を見出し、丁寧にアプローチしていたことを知ることができた。旧蔵者の田村悟史氏に敬意を表したい。

田村旧蔵の資料を九大博物館で受け入れるにあたり、ご遺族から大いに活用して欲しいという要望があったという〔三島 2018：34〕。これまであまり研究がすすめられてこなかったスリーブについては、研究の手法から探っていく必要があるが、スリーブの分類や体系化を実践できれば、田村コレクションをもちいた新たなレコード研究によって「レコード学」〔毛利 2022〕の構築に近づくことができると考えている。

なお本稿は、サントリー文化財団による助成研究の成果の一部である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、筆者らが発起人となって組織する歴史的音源所蔵機関ネットワーク（愛称 レキレコ）のメンバーには多大な助言をいただいた。とくに大西秀紀氏、毛利眞人氏、柳知明氏からは専門的な知見から貴重な情報を提供いただいた。また研究資料の作成については九州大学大学院院生の青木清太氏の協力を得た。お名前を記して謝意を申し上げたい。

注

- たとえば、SP レコードコンサート「近代日本を彩る音と音楽」（2018年11月18日、日本アートマネジメント学会九州部会研究会「五感で知る九州大学総合研究博物館」、於：九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館4階会議室）やSP レコード上演会「田村コレクションの古賀政男を聴く」（2019年5月26日、於：九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館4階会議室）などがある。
- 盤面中央の紙貼り部分もレーベルというが、本稿ではレコード会社がもうけた商標という意味でのレーベルが大変重要な術語となることから、混乱を避けるためここではあえて使用しなかった。
- コロムビアのスリーブが入っている11箱の内訳は、1～129までの札付きの箱（a-1）が1箱、その重複分（a-2）が10箱である。
- 分類表は、田村が長年活動を記録してきた膨大な量の資料群のうち「田村用」と記したファイルのなかに保管されていた。ファイルに綴じられた資料からはSP レコードに関する田村の壮大な計画や熱い思いを読み取ることができ、SP レコード目録や音盤史など書籍出版を目指していたことも明らかとなった。書籍化については田村が不定期でおこなったSP レコードコンサート「SP レコード研究会」とも深く関連すると

考えられるため、稿をあらためて紹介したい。

- 5 段ボールに書かれた「未分類」と「未整理」の使い分けについて中身を確認しながら分析を試みたが、今のところ明確な違いを把握することができなかった。今後の課題としたい。
- 6 SP レコードを販売していた時代の会社史については、レコードに関連した論考や記録（たとえば〔倉田1979〕や〔日本レコード協会 1993〕）ではかならず言及されるほか、レコード会社の記念誌（たとえば〔日本蓄音器商会 1940〕）でそれぞれの会社の詳細を把握することはできる。しかし日本におけるレコード会社史全体についてまとめられたものは少なく、昭和13年末時点の状況については〔内務省警保局 1938〕で確認できるものの補足すべき点も多い。また現代において作成されたものとしては、たとえば〔佐藤 1966〕があるが、販売タイトル数が多いメジャーレーベルが主で、マイナーレーベルや存続期間が短いレコード会社については記されていない。

参考文献

- 大久保真利子「田村悟史作成のSP レコードデータベース——その特徴と公開に向けての課題——」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第15-16号：pp.35-43, 2018.
- 大久保真利子；三島美佐子；柳知明「SP レコードを受け継ぎ活用するということ——全国所蔵機関調査をもとに——」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第19号：15, 2022.
- 大西秀紀『SP レコードレーベルに見る日蓄——日本コロムビアの歴史——』、京都：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2011.
- 京谷啓徳「レコード袋の図像学——SP 盤周辺のデザインをめぐるノート——」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第15-16号：pp.57-64, 2018.
- 倉田喜弘『日本レコード文化史』東京：東京書籍、1979.
- 佐藤道子「邦楽レコードの変遷——義太夫節を中心として——」、『東京国立文化財研究所蔵 音盤目録Ⅰ』、pp: 347-368, 1966.
- 内務省警保局『蓄音機レコード製作所並發行所明細表 昭和13年末現在』、東京：内務省警保局図書課、1938.
- 日本蓄音器商会編『日蓄（コロムビア）三十年史』、東京：日本蓄音器商会、1940.
- 日本レコード協会『財団法人日本レコード協会50年史 ある文化産業の歩いた道』、東京：財団法人日本レコード協会、1993.
- 三島美佐子「田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第15-16号：pp.31-34, 2018.
- 毛利眞人「国産SP 盤レコード袋 図案集」、『森本書店』36号：5-39, 私家版、2021.
- 同上『SP レコード入門——基礎知識から史料活用まで』、東京：スタイルノート、2022.

Received Dec. 26, 2023; accepted Jan. 4, 2024

A study on SP record sleeves: Arrangements and Research of the Tamura Satoshi Collection

Mariko OKUBO

The Kyushu University Museum
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

The Kyushu University Museum owns approximately 40,000 SP records as well as the related material. This paper focuses on the bags used to hold records (sleeves), introduces the contents and classification of the collection, and discusses issues when using them for research.

Key words: sleeves, record (78rpm), record company history, Tamura Satoshi